

公益のまちづくり

―「日本一ふじの里づくり」山形県藤島町にて―

小松 隆二

序

本稿は、二〇〇二（平成一四）年八月二三日に山形県庄内地区の藤島町において行った講演をまとめたものです。当日は「藤島町中心街まちづくり協議会」の発会式、同時に第一回協議会として部会や全体会の審議も行われました。その協議会において記念講演の役を仰せつかって行ったものが本稿です。

藤島町は、古い城下町ですが、庄内平野の只中に位置する農業中心の典型的な東北の農村です。町の売り物や

モットーが「米と獅子の里」「ふじの里」であることも、十分に農村を推測させてくれます。とくに町名を印象づけることもあつて「日本一ふじの里づくり」を目指しています。日本一のゴールもほぼ手中に収めているといつてよいでしょう。

藤島のあたりには、春から夏にかけては緑一面に、また秋には稲穂が黄金色に輝く田圃や畑がゆったりどこまでも続くほど、のどかで平和な光景が繰り広げられます。しかし、冬になり、ひとたび地底から激しく雪を舞い上げる感じの出羽特有の地吹雪にでもあえば、一寸先も見えず、前に進むにも苦勞する厳しさを経験させられます。

いかにも自然が恵みでもあり、同時に脅威でもある東北の農村の姿がそこにはあります。

加えて、農村を象徴する巨大な農業倉庫群や豊かな堰・用水路（因幡堰など）をまわってみると、さらに圧倒され、並みの農村ではないことにもすぐに気付きます。いずれも、歴史が古く、由緒のある施設だけに、そのいわれなどを知って眺めれば、一種の感動を覚えるのは、当然ともいえるわけです。

それでいて、城下町としての伝統や誇りもあり、地域でも文化でも、昔ながらの古風な部分と若くフレッシュな新しい部分がうまく融合した味わいをももたしています。狭いながら古い田舎風の町並みが静かに息づく旧町域、それに対してけやきなどの並木、町の売りものの藤棚が美しく連なる、ふじロードなどの街路からなる明るく爽やかな新町域のコントラストも、興味を引きます。散策すると、城下町の伝統からか道路が基盤の眼とはほど遠く、よく道を間違えたり、迷ったりします。ところが、遠回りや同じところに何度も戻ったりする迷いをくり返しても、趣き・味わいのある町並みにむしろ楽し

みを感じさせします。

藤島町は、面積が六三・二二平方キロメートル。決して広い方ではありません。面積では、山形県でも小さい町村の一つです。人口は二二、二九四人（平成一三年一〇月一日現在）で、庄内一四市町村のなかでは、五番目の大きさです。一世帯あたりの人員は四・一七人で山形県でも上から七番めとなっています。六五歳以上の高齢者人口は二五・五％と、過疎地域に近い特色を示しています。庄内では、決して高い方ではありませんが、全国的にみれば、きわめて高率です。

こんな藤島町が、市町村合併問題がかしくなると、合併の評価基準の一つにならなくてはならない「まちづくり」に熱心に取り組むようになりました。しかも、その取り組みが住民参加を積極的にすすめるというきわめて前向きなものです。この住民参加方式をみるだけでも、公益のまちづくりに通ずるものがあるので、大変注目しているところです。以下は、その第一回協議会の際の講演概要に手を加え、書き直したものです。

1. 活性化への可能性

今日の集まりの課題は、中心街のまちづくりです。地方の市町村のほとんどが、中心街の求心力・活性化へのエネルギーを失う現実に向面しています。中心街の低迷に、地方の時代の到来どころか、町全体の低迷、そして沈没への危険にさらされています。そこから、地方の時代がなお遠い現実を如実にうかがうこともできません。

こんな深刻な状況を抱えたテーマですので、まちづくりは難しい内容・問題を含んでいます。どの市町村もそれに気付き、真剣にとりくんではいますが、ほとんどが対応に苦慮しています。取り組んではみるのですが、容易にはうまくいきません。

藤島でも、かなり前からまちづくり、とくに中心街のまちづくりに取り組んできました。活性化計画、総合計画、マスタープランなども策定してきました。しかし、ある程度の成果は上げていますが、目だって大きく前進できたわけではありません。ただ、幸い藤島は、歴史的に

も、また現状でも、どこにも負けない売りものを沢山持った個性的な素晴らしい町です。中心街というわけはありませんが、いたるところに、町づくりの成果も着実に積み上げています。取り組み方によつては、今後の大きなまちづくりに可能性が十分に秘められていることを教えられます。

このように、藤島は、市町村合併問題に向面して、どうすべきか悩んで、ただ頭をかかえているだけの町とは違って、早くからまちづくりを主題にして取り組んできました。その姿勢と成果は高く評価できます。前回の講演とシンポジウム(本年七月二〇日開催)、そして今日の集会のために準備された資料を拝見するだけでも、他の市町村に比べて大変興味を引く着眼点を持ち、前向きな姿勢で臨んでいることがうかがえます。

なによりも、本日のまちづくり協議会の設置案・ルールといい、またボランティア・個人参加を歓迎する方法論といい、よく工夫されています。中心街の活性化だけでなく、総合的な視点もきちんと用意されていて、今後に楽しみがもてます。この藤島がまちづくりに成功でき

ないようでは、日本では地方の時代の実現は無理ではないかといった思いを抱かされるほどです。正直なところ、藤島を持つ蓄積やエネルギーからすれば、私の話など不要ではないかとも考えているくらいです。

ただ急いでもだめで多少の時間はかけた方がよいので、少し休憩や周り道も必要です。そのような気持ちで私の話に耳を傾けていただければ幸いです。

2. 英国の農村のまち

この夏、7月末でしたが、3、4年ぶりに英国を訪ねました。ロンドンを中心に動きまわるほか、ロンドンの北東に位置するサフォークのホテル、イックワースハウスに宿泊、伝統のある美しい地方の町ベリーセントエドマンズ、タルブースなどを楽しみました。このホテルは、ナショナル・トラストの経営するもので、本家のナショナル・トラストのスケールの大きさをまざまざと見せつけられました。

ロンドンの街路の塵や埃の多さに比べて、サフォーク

の田舎の美しさには改めて感動させられました。この地方の自然や景観は日本でも風景画家としてよく知られるコンスタブル（1776―1837）が愛したものです。彼が描いた森や林、小川や橋が今もそのまま残っているところがあるほどです。200年も昔の光景がそのまま保存されているというのも、自然や田舎を大切にする英国らしい話です。

私どもの泊まったイックワースハウスはこの7月に開業したばかりのホテルです。このホテルは、マグナカルタの草案が作成された町ベリーセントエドマンズの郊外にあります。元国会議員で富豪が所有した英国では典型的なカウントリーハウスです。広大な敷地と荘園風の庭園や森林、そして巨大なマナーハウスが、主の死後、ナショナル・トラストに引き継がれ、整備された後、ホテル、博物館、庭園などとして公開されたものです。

とくに博物館は、個人が残したものにしておおきく、日本にある並の公設博物館の広さは十分にもっています。日本と違う点は、その運営が主に町民のボランティアによって維持されていることです。

その近くには、果樹園、花のある町、花のあるレスト

ランなども楽しめます。そこでは、どのテーブルからも花を觀賞しつつ食事を楽しめたり、農園にふれつつ食事ができたり、英国の田舎ならではの長閑な楽しみがあれこれ享受できます。こんなアイディアを集めた素晴らしい地域は、英国独特の田舎の風情ですが、いたるところで見られます。英国の伝統・文化の広さと深さを見せつけられますが、日本の町や村も、人を集めたり、活性化したかったら、ただお金をかければいいのではないこと、田舎には田舎を生かしたあり方、村には村の良さを生かしたあり方のほうが、お金もかからず、客も惹き付けることを教えてくれます。

自然や田園地帯を愛し、大切にする国、自分の生活から大切にする国、それが英国です。自分の生活から良くしていくのですが、そのためには、そこに止まらず地域や社会との共存・調和がつねに視野に入った取り組みが必要です。それを現実化しているのが、英国の生活づくり・まちづくりです。もちろん英国だけではなく、ヨーロッパの古い国々は大体同じような生活づくり・まちづくり

を行ってきました。

私の手元に、公益大学で同僚の遠山茂樹さんの小さな大作『森と庭園の英国史』（文芸春秋社、2002年）があります。その中にも、例えば、英国の国立公園の土地が大部分は国有ではなく、個人やナショナル・トラストの所有であること（121頁）、個人の庭園が一般のトレッキングなどのコースにもなることが記述されています。そこから、個人の庭園が半ば公的な性格をもっていること、そういう気持ち・意識で個人も庭づくりもやっていることがわかります。

こんなことを話しますのは、実は藤島のような農村の町起こしやまちづくりには英国はじめ、ヨーロッパ諸国のあり方・思想が大変参考になるからです。

真似・模倣の得意なはずの日本人が何故、地域・まちづくりでは、西欧の良さを真似しなかったのか、不思議です。一部の皇族や財閥の戦前の邸宅には西欧風の立派なものがみられますが、英国のカウンتریハウスのスケールに比べたら、遥かに小さなものです。

かつて、昭和初期になります、早稲田大学の高田早

苗総長は、ヨーロッパ諸国を訪ね、とくに英国の大学のあり方に感心しました。地域と一体で開放的な大学のキャンパスはまさにまちづくり・地域づくりの発想にたっていること、大学と地域が一体であることに心を打たれ、帰国後、早稲田大学の大学づくりに応用しました。また最上地区の金山町の岸英一元町長はとくにドイツなどヨーロッパの町づくりに感動して、帰国後、他の町にみられないまちづくりを始めました。

しかし、いずれも徹底した真似ではありませんでした。見方によると、まだまだ本物ではなく、中途半端な真似にとどまりました。それでも、早稲田大学や金山町は、日本では最も進んだ大学町や良好なまちづくりをして注目される部類に属します。

この辺に、藤島のまちづくりのヒントもあるように思っています。この点はまた後でふれたいと思いますが、是非考えていただきたいことです。

3. 庄内の市町村

日本には、残念ながら、夢のような世界に誘い込んでくれる町、滞在しているだけで感動するような町はほとんどみられません。もちろんある部分、特定の地域でだけなら、日本の町にもいい町はいくらでもあります。部分と言ったら地図でみたら〈点〉になります。その程度なら何とか格好のつく町はいくらでもあるでしょう。

ただ、全体が素晴らしい町、その町のどこへ行ってもすばらしい町はそうあるものではありません。町を歩いても、汚い部分の方がやたらに目に入ってきます。素晴らしい町があるとしたら、全体が国立公園の中にある小さな村くらいでしょうか。

それに、地方の町村がどんどん人口を減少させ、さびれています。結構いいと思える町まで、人が去り、文化的潤いも失せている場合があります。小さい町だから、山の中だから、寂れる一方というのはどこかおかしい。欧米には山の中の町村だって、頑張っているところ、多くの人を惹きつけている町や村はいくらでもあります。実

際に、辺鄙なところでも、町や村全体が夢のようなまちがいくらでもあります。

スイス、オーストリー、英国などでそんな経験をされた方が少なくないと思います。例えば、英国・ウェールズ山中の古本の町ヘイ・オン・ワイなどは世界中から古書ファンを集めています。私も2度訪ねていますが、日本からも多くの人が訪ねています。

それに対して、庄内、おそらく山形全体が、まちづくりに関しては日本の中では比較的条件に恵まれている方だと思っています。他のどの地域にも負けません。山形全体でも、また庄内のどの市町村でも、他にない良さ、売り物がみられます。例えば売り物として「〇〇の里」程度の伝統・史跡が必ずあり、守りたいものの、残したいと思うものがいろいろあります。また新しい施策として生まれた新開地といえる地域・部分でも爽やかで惹かれるものを持っています。

とりわけ庄内は素晴らしく、庄内の市町村や住民の皆さんは自信をもっていると思います。しっかりとしたまちづくりプランを持てば、大いに希望がもてます。藤島と

隣接する町のみみても、庄内の中心の一つの鶴岡はもちろん、羽黒、立川、三川などれをとつてもそういうことがいえます。

例えば、鶴岡は城下町として、城跡、史跡、歴史的建造物、文化・芸能、用水路・堰などで注目すべきものをもっています。立川は、用水路・堰、風・風文化・風力発電、黒塀の町並みなど、羽黒は、出羽三山、松ヶ岡開墾場、高寺八講など、また三川は、神楽、横山城址などと、どの町もみんな売り物、素晴らしい特徴をもっています。他県の市町村には、こんなにまちづくりに向けて、いい条件を揃えた町ばかりではありません。他地域からお客が訪ねてきても胸を張って案内できるところがろくにない町さえあります。

にもかかわらず、町全体がきれいにならなかったり、まちづくりが成功しなかったり、中心街には人が集まらず、さびれたり、さらには過疎地域になったりという話ですが、このような個性・特徴のある庄内や山形の市町村でも聞かれます。各々の市町村で対応策が検討されますが、これまでは具体的には説得力のある対抗策・案もで

てきません。点や場の施策、あるいは中心街の活性対策を超えて町全体に及ぶ素晴らしい夢のあるまちづくりというところまでは遠い状態です。

4、日本のまちづくりに

欠けていたこと

欧米の町村のあり方やまちづくりと、日本のそれでは、いったい何が違うのでしょうか。

ヒントは、政治や行政の対応のみの相違ではないということです。たしかに政治や行政がその気にならなかったら、まちづくりは無理といっていらいです。しかしそれだけではありません。実は、住民の生活の意識・あり方、住宅や地域に対する住民の考え方・関係のしかたの相違の方が大きいと思います。

行政は、町の隅々まで、また一軒一軒の家にまで政策を施したり、指図したりはできません。手の届かない部分の方がむしろ多いくらいです。

日本の町村や道路の汚いのは、公的な地域や部分とい

うよりも、一般住民の住宅や地域の方であるのが普通です。その方が圧倒的に多いと思います。一軒一軒、所有者ごとに住宅や住まいにかんする考えや趣味がまちまちです。自分の家や土地にしか関心のない人、自分の住宅や庭づくりについて、周りとのバランスや地域全体がよくなるようにという考えなしに、自分のことしか考えないで生活している人も、少なくありません。

実際に、自分の住宅など建物や庭をつくったり、維持したりするのに、地域全体とどう統合性やバランスをとるか、といったことは、ほとんど考えられていません。花で飾ったきれいな家があるかと思うと、隣は、花も緑もないだけでなく、汚くて捨てた方がいいようなガラクタを雑然と放ったままにしていたりします。それによって地域全体が調和や温かみもなく、何となく汚く、何となく落ち着きません。

行政が街路樹をきれいに植えた地域・道路でも、折角の街路樹が生きていないところも結構あります。たしかに街路樹はきれいなのですが、その通りに沿う住宅など建物がまったくバラバラ、しかも広告だらけの上、自分

の庭や住宅に加えて、その周辺もきれいにしようという気持ちのまつたくない人もいるからです。このような公益が忘れられた対応が、案外広く見られるのが日本の国民・住民の生活・家づくりの現実です。

また遠くに素晴らしい景観が広がっているのに、道路からそれを見わたしても、いかにも雑然として落ち着かないことがあります。注意してみたら、一軒一軒がソポを向き合っていたり、門や塀の高さ、質、色も全くまちまちだったり、電柱・電線が滅茶苦茶に入り組んだりして景観を台無しにしているのです。

どうも一人一人が社会的自覚、まちづくりへの参加意識、よりよい景観や環境づくりに無頓着だったように思います。町全体をみんなで協力してきれいにしようということでは、下からの盛り上がりがあつて初めて本物になります。電線電柱にしろ、電力会社のみでなく、国も協力する大事業として地下に埋める施策などを下から要求・実現してこそ、気持ちよく、住みよい町にすることもできます。そんなことには、これまで、私も全体が人任せか、あきらめの姿勢だったと思います。

5. 藤島の特徴・個性

藤島のまちづくりにとつて、何が課題かを見る前に、外からみた印象になりますが、藤島の特徴を整理してみよう。皆さんはよくご存知のとおり藤島には沢山いいところがあります。いずれもまちづくりには、ぜひ生かしたい良さであり、特徴です。

まず第一に、自然・景観の素晴らしさです。鳥海山と月山に挟まれた広大な水田地帯の中で、稲穂、それに緑と花があふれる地域です。この美しさは庄内全体にいえませんが、藤島もそれを誇ることができます。この町を歩いていると、本当に気持ちがよくなってきました。この自然・景観の良さを活かさない手はありません。

第二に、古さと新しさの調和のとれたまちの配置です。古さのない世界・地域は重みや座り心地のよい土台が欠けているようなものです。これまでのまちづくりは、古さをよく残し、新しさをうまく生み出したものです。古い賜物である城址や旧庁舎・東田川文化会館、旧町域

や旧街道、倉庫や因幡堰などの用水路・堰、それに対して、最近の成果である、けやきなどの街路樹を美しく植えて美化・整備した新しい街路、それに沿う町役場や公民館などの地域が、今後のまちづくりの大変な土台・財産になるはずだ。

第三に、農村としての良さ・素晴らしさが残っていることです。藤島は、農村、しかも米どころ庄内平野の中心に位置します。農業関連には財産が沢山あります。農の伝統を守り、かつ農業を活かして現在の、そして将来の取り組みを真剣に考えてきました。他に例を見ないほど沢山の倉庫群や農業高校の存在も、米どころ庄内の中心の一つであることをうかがわれます。いずれも農業活動の他、まちづくりにも使えます。この良さをいかに保存し生かすかに、藤島のまちづくりが夢のあるものになるかどうか、かかっているように思います。

第四に、まちづくりに取り組む姿勢に、行政にも、町民にも、積極性が見られることです。他市町村に比べて町民の皆さんが前向き、建設的です。この協議会のありかた自体、行政はただ上に立つだけではなく、町民の参

加に期待し、その才能や意欲を生かそうとしています。この住民の参加と協力は大変なエネルギーになっていくと思います。要は、そのあり方を持続できるかどうかでしょう。

6. まちづくりの課題

それでは、具体的に藤島でどのようにまちづくりを進めたらよいのでしょうか。当然考えられるのは、今言ったような他地域に無い藤島の特徴・良さを生かすことです。とくに農村・農業の良さを生かすことになりますが、それらを整理すると、次のような点があげられます。

まず第一に、長期的で遠大な、町全体にわたる「まちづくりプラン」を作成することです。可能な範囲から、あるいは中心街など特定の地域からという部分的でありふれたプランでは、希望や夢をもてません。どうせなら町全体にわたる夢のある大胆なプランをたてることです。東北一どころか、日本全体でも、ナンバーワンやオンリーワンとなるものをどんどん組み込んで、他市町村も

あつと驚くようなプランにすることが必要です。

第二に、一方で伝統・蓄積を大切にすること、また他方でそれを生かした新しい計画・事業もドンドン取り入れることです。大都会や流行の真似・後追いではよくありません。藤島らしさをあくまで生かすことです。

一方で伝統や古い良さ、例えば城跡、東田川文化会館、獅子舞、神楽、それに農業倉庫、因幡堰など、他方で新しい実験と成果である藤棚のふじロード、けやきなどの並木をもつ通り・地域にみられる実績を大いに生かすこと、しかもそれらに基づくアイディアも積極的に取り入れることが肝要です。

幸い藤島には、古い農業倉庫や堰のみか、現在も「ふじつくり日本」「獅子の里」など売り物がたくさんあります。特徴・個性では申し分ありません。そういった良さを生かすことこそ、とくに農村・農業地帯として何よりも必要でしょう。というよりも、鍵は農村・農業にあり、その味・特色をどう出すかで将来はまったく変わつてくると思います。広い土地、豊かな用水路、趣きのある倉庫群、多くの花々、生かすものは沢山あります。

第三に、最も大切なことは町・行政と町民の協力・連帯です。行政だけが頑張っても良いまちづくりはできません。町民の参加・協力・連帯が不可欠です。そういう点で、今回のまちづくりに際して、まちづくり協議会会員を町民に呼びかけ、公募しているのは、大変進んだアイディアで、楽しみですな出発になったと思います。

今後、アイディアやプランの公募など、可能な限り町民の力を引き出すことが欠かせません。参加・協力・連帯というのは、多様に考えることができるはずで

す。自治体ができることは、まちづくりでも、実践面ではせいぜい〈場〉〈点〉の政策どまりです。隅々まで何もかもはできません。それぞれの場・点をつなぐのは町民の役割です。町民も、行政任せでは駄目です。ただ任せきりだったり、文句ばかりいつているようではいけません。自分の住居・庭、周辺の美化からはじまる地域づくり・まちづくりに参加・協力・連帯することが不可欠です。自分の暮らし・環境をより良くするためには、それくらいのことは当然しなくては地域全体・まち全体が変わりません。それこそ、公益のまちづくりに適うものでも

あります。

こういったことを、欧米の町や村は実施しています。欧米にきれいな町や村が多いのは、行政の力だけによるわけではありません。公的政策やプランに住民が参加し協力してきた賜物です。

まちや道路が汚く、魅力がないのは、国や自治体の責任とばかり考えてはいけません。町・地域が汚いのは住民の責任でもあります。地域を散歩していても、住宅街でも、きれいで思わず立ち止まったり、ほっとする家、そうかと思うと、すぐ近くには汚くて、目をそむけたくなる家があったりというのが現実です。この状態を一人一人の住民の自覚と協力によって何とかしなくてはなりません。まだまだ住民にも問題が多く、まず各自の役割や責任を自覚する必要があります。

もつとも道路づくり・住宅造り・庭造りに、町としても基準・標準を示したり、指導したり、さらにはそれに協力するものには補助金を出す政策を導入することなども、しばらくは必要になるでしょう。国も、町民の協力に対して、個人の資産・施設の公益化・ナショナル・ト

ラスト化などを応援するためにも、減免税、手続きの簡素化など政策的協力の必要もできるかもしれません。

7. 結びに

いまや、藤島に限らず、どの市町村も、大胆にまちづくりに取りくむときです。目先を追うプラン、縮み志向の抑制したプラン、猿真似的だったり流行を追ったりするプランでは余り意味がありません。大都会何するものぞ、中央何するものぞ、といった高い理想や意気が必要です。それを掲げ、実行するだけの土壌・条件は藤島には揃っています。日本のまちづくりに欠けているのは、皆をひき付けるに足る高い理想や夢、スケールの大きなプランです。それこそ、公益性の面でも評価の高いものになります。藤島もそれを忘れては、ほとんど意味のないつまらぬまちづくりになるように思います。

実際に、日本のまちづくりの大方で見られるのは、個性も魅力も乏しい、どこにでもある縮み志向のプランで終っているものです。それでは、たしかに実現は可能で

しょうが、夢も希望も誇りも抱けません。

話を終るにあたって、繰り返しになりますが、改めて二つのことを強調・確認しておきたいと思います。

その一つは、行政レベルで胸のわくわくするような遠大なまちづくりプランを作成すること、もう一つは、住民の参加と協力、あわせて官民の協力・連帯を具体化するということです。毎年委員会や審議会から型通りに提出されるような計画書や報告書ではなく、心をこめ、夢を乗せた遠大なプランが必要です。他の市町村からは大風呂敷すぎると笑われようと、どうみられようと構わない。遠い将来を見据えた夢のある計画を住民の参加と連帯を得て実現してほしいものです。

福祉などいろいろの分野で、住民の参加、協力が進んでいます。まちづくりも、政治や行政の役割や責任のみで終らせるのではなく、住民も自宅中心に生活の足下、さらにその周辺など、可能なところから参加、協力をすることだろうと考えます。

自分にも良く、皆にも社会にも良い町を全域につくるには、自治体・行政だけでなく、住民も参加・努力する

ことが必要です。自分の生活・環境が本当に良くなるには、地域・町全体もよくなりなくては駄目です。文句や要求ばかりではよくなりません。それが公益の基本的な考え方です。それに沿うまちづくりこそ、公益のまちづくりといえます。

その上に、官民協力すれば、具体的に中心街をどうするかなど、いろいろのアイデアがでてくるはずです。倉庫や堰一つとっても、藤島は全国から羨ましがられ、注目されるだけの土台・蓄積をもっています。要は、猿真似ではなく、藤島を藤島らしく、藤島の良き・農村としての良さを大胆に押し出しつつ、子供や孫たち子孫にも誇れるまちづくりを皆でしたいものです。行政任せ人任せでは、夢や希望のある公益のまちづくりはできません。町民・住民の皆さんの参加と協力が不可欠です。その確認と決断が必要です。その踏み出しができるかどうか藤島の将来はかかっています。

どうもお疲れ様でした。